



※竹細工（鼠）・辻本会長の作品です。



新年ご挨拶

新年明けましておめでとうございます。昨年半年ばから令和に年号も代わったこともあり、あっという間に一年が過ぎ去ったと感じた年でした。

一昨年は会員の悲しい報告が続きましたが、昨年は新しい会員の入会があったり、大和大学での酒害教室での啓発活動が開始されたりと、通年の断酒会活動以上に忙しく活動させて頂きました。

本年も引き続き啓発活動を広く継続させていきたいと考えております。

昨年の目標である、出来る限りの朋友断酒例会への参加により断酒例会の活性化にも微力ながら協力出来たと感じています。

断酒継続の基本である断酒例会への参加も含め、断酒会活性化の為に会員、御家族皆様のご協力宜しくお願いします。

さて本年のメインイベントである45周年記念大会が五月六日に迫ってまいりました。吹田市断酒会員一丸となり今年の大イベントを成功裏に終われますよう活動、協力の程よろしくお願ひします。

皆様のご多幸、御健勝を祈念して新年のご挨拶といたします。本年もどうぞよろしくお願ひ致します。

令和二年元旦

吹田市断酒会 会長 辻本 武

新年私のひとこと（五十音順・敬称略）

今年はいろいろな面で新たな事が起こりそうです。還暦を迎え、頑張ります。
(吹田・本人)

昨年のバレンタインデーから禁煙中。従って我が家は『不許煙酒入玄関』です。
(南千里・本人)

明けましておめでとうございます。今年一年、お酒を飲まずに、平安なところでいられればと思います。
(南千里・本人)

今年も一年お酒を飲まずにすごせそうです。来年も今年のみかさねです。ごします。
(吹田・本人)

仕事をテキパキこなして、例会参加回数を増やします。まずは、昼例会から！
(吹田・本人)

父の断酒のために、まず私が、断酒継続を！そして断酒会への出席を続けたいです。
(吹田・家族)

一月は阪神淡路大震災二十五年。私の断酒スタートは八月末。忘れたいことと忘れてはならないことを胸に刻み続けたいと思います。
(吹田・本人)

先のこと敢えて考えず、ただ目の前の課題に、笑顔で向き合える自分でありたいものです。
(南千里・本人)

夫の断酒も七年目に入りました。心穏やかに過ごせる日々が増えていきます。断酒会の家族会は自分を見つめる場になっています。仲間の皆様に感謝しながら今年も頑張ります。
(南千里・家族)

あけましておめでとうございます。断酒道もまだ道半ば、六年です。今年もがんばります。
(南千里・本人)

今年が家族の健康第一で、少し「ゆとり」をもつて生活していきたいと思っています。

(吹田・家族)

我が我がの「我」を捨てて

お陰お陰の「下」で生きよ。

断酒会の中で回復させてもらいます。

(吹田・本人)

今年が末孫も中学生。私はキャリアハイを継続しつづけた。チャンスがあれば秘境路線バス旅に出てみたい。

(南千里・本人)

元号は令和に変わっても、酒無し生活は変えられんわ。継続は「力」を信じて。

(吹田・本人)

体技心、まず体を整え心を動かし例会出席に頑張ります。

(南千里・本人)

昨年は十二月にさんさんだったが、今年が良い年になりますように。

(南千里・本人)

二十周年の表彰をいただき、がんばっている主人に、私も一緒にいって行きた、今年も共にがんばりたいと思います。

(南千里・家族)

旧年中はお世話になりました。断酒会のおかげで本年があります。本年も一日断酒で頑張ります。

(南千里・本人)

“去年今年（こそことし）貫く棒の如きもの”

私が生まれた年に作られた高浜虚子の句である。時代が変わっても、年齢を重ねても愚直に生きることを忘れないようにして過ごしたい。

(南千里・本人)

あの辛い悲しい時を思えば断酒はできる。飲みたくなったら、辛いあの時を思い出そう。

(吹田・本人)

明けましておめでとうございます。三年目の表彰状が頂けるよう、今年もよろしくお願ひします。

(吹田・家族)

今年こそ穏やかな一年を過ごせるように、信頼できる家族関係を取り戻したいです。

(吹田・家族)

あけましておめでとうございます。今年も一年断酒を継ぐようガンバります。

(吹田・本人)

神棚にそなえた水も酒に見ゆる

(吹田・本人)

今年も一年、例会出席、一日断酒でがんばります。

(南千里・本人)

今年もたくさんさんの投稿を

ありがとうございました。



【今月の「指針と規範」】

断酒新生指針四

お互いの人格の触れ合い、心の結びつきが断酒を可能にすることを認め、仲間たちとの信頼を深める

われわれの断酒が継続され、人格の向上がたゆみなく続いている要因のひとつの柱に、酒害者同士の濃密な仲間意識がある。常に助け合い励まし合う友愛を、傷つけない裏切らない友情を、社会一般の人たちよりずっと重視しているところにある。そうした強い信頼関係をつくるためには、仲間たちの断酒論を理解することより、人間そのものを深く理解する方が重要である。

より深く理解しようと努力する過程でお互いの人格の触れ合いがあり、心と心の結びつきが始まる。ついには、何でも話せ、何でもわかり合える関係にまでな

れる。

いまだに偏見、誤解の目で見られているアルコール依存症という病気の実体を、正確に理解しているのはわれわれ当事者と、家族を含めた一部の人たちでしかないことを考えると、われわれ仲間同士の心と心がしっかりと結びつくことは、ごく自然なことでもある。

しかし、よくよく考えると、努力して仲間たちとの信頼関係をつくったずっと以前から、われわれは仲間たちを信じ、断酒会を信じていた。断酒会に入会したとき、仲間たちは今まで関わってきたどんな人たちよりも、われわれのことを理解してくれた。こうした人たちがいるからこそ断酒会は信じられる、と思った。

つまり、信じるということが、われわれには最初からあったのである。だから、初心に還りさえすれば、どんなに物の考え方に差があったとしても、信頼関係をつくれなはずはないのである。

(指針と規範 P26～27)